

静岡県立こども病院

こども病院ひろば

創刊号

発行日

平成24年
5月22日

編集 地域医療連携室 〒420-8660 静岡市葵区漆山 860 TEL: 054-247-6251 (代表) FAX: 054-247-5688 (直通)



少し開花の遅れた桜の季節が過ぎ、若葉が目に見えないうちの時期となりました。病診連携、病病連携では、平生より当院をご利用いただき誠にありがとうございます。先生方への情報発信をさらに活発にして連携の実を上げるため、本年度から、これまでの“タンポポ”“こども病院だより”を合体し、“こども病院ひろば”という新しいタイトルで隔月発行といたします。皆様方にこども病院のことをより身近に、より深く知っていただけるよう、内容の充実に努めたいと考えております。また、地域に開かれた病院作りも大きな基本方針です。多くの人が集うという意味を込めて“ひろば”といたしました。いずれは広報紙にご執筆をお願いしたり、ご意見を掲載させていただくこともあろうかと思っております。

また、当院での様々な講演会、勉強会等にお気軽にご参加いただければ幸甚に存じます。今後とも地域の医療機関と機能分担しながら、円滑な連携を推進していきたいと考えておりますので、益々のご交誼ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

院長 瀬戸嗣郎



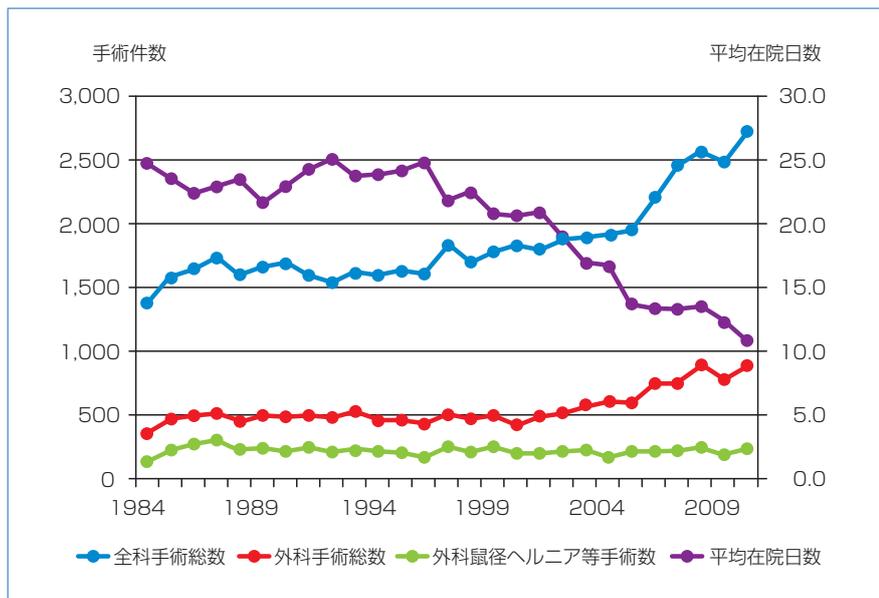


静岡県立こども病院の 退職にあたって

前副院長 小児外科 長谷川史郎

このたび静岡県立こども病院を定年退職いたしました。1984年から通算すると27年間を静岡県立こども病院で勤務させていただきました。この間多くの先生方から力強いご支援をいただき、また大切な患者様をご紹介いただき、こども達の医療に参加できましたこと心よりお礼申し上げます。

こども病院の資料をみますと1977年開院直後の数年の年間、手術数は病院全体で1000~1200件、小児外科で200~350件程度でした。その後多くのご紹介をいただくようになってきています。国の医療施策の変化により、ここ10数年ほどは入院期間の短縮化が推進され、当院の平均在院日数も大幅に短縮され2011年度には10日前後になろうとしています。それに伴い病院全体の手術数もここ数年は年間2500件を超えるようになり、小児外科も急増し、そけいヘルニアや陰嚢水腫などの小手術の数こそ変わりませんが、全体の手術数は年間900件を超えようとしています。全国統計は公表されていないものの、この小児外科の手術件数は、全国の小児病院および大学病院を含め上位5番以内です。大都市以外にある小児病院としては、きわめて多くの患者様をご紹介いただいていることとなります。皆様のご支持により、静岡県の小児外科医療は効率的に集約化が進んでいるものと深く感謝しています。入院期間の短縮はご家族の希望でもありますが、ベッド回転が速くなり、安全により良い医療を行うためには密接な地域連携が不可欠であり、その重要性はますます大きくなるものと思われまます。速やかな情報の共有など、こども病院の更なる努力が求められていることを実感します。



さて当院小児外科には、開院以来2011年までに81名の医師が勤務してきました。そして小児外科もしくは外科の教授6名、大学教授4名、他の小児病院外科科長3名をはじめとして、その多くが小児医療を中心に全国で活躍しています。これも紹介いただく患者様が多く、他にはない密度の高い研修や経験を当院では積むことができるためと考えています。

今後は、ともに小児外科を築いて

きた漆原直人先生を中心に、小児外科のレベルをさらに上げ、より一層地域医療の発展に努めたいと存じます。微力ではありますが、私もしばらく、一部外来をさせていただきますので、今後ともよろしく申し上げます。ありがとうございました。

新生児未熟児科の紹介

新生児センター
田中 靖彦

当院の新生児未熟児科は静岡県中部の周産期医療を担う総合周産期母子医療センターの新生児部門としての役割を果たしています。早産児、低出生体重児、新生児仮死、感染症、呼吸障害、先天性心疾患、新生児外科疾患などあらゆる新生児疾患の治療を行います。



当院NICUで行っている診療

- 超低出生体重児（出生体重が1000g未満）の入院治療が行えるのは、中部では当院のみです。「後遺症のない生存」を目指して、きめ細かい管理を行います。2011年は53名の入院がありました。
- 重症新生児仮死の赤ちゃんの脳障害を予防するために脳低温療法を行います。昨年は8名に行いました。
- 腎臓内科とも協力のもと血液浄化療法を4名に行いました。超低出生体重児の重症の敗血症に対し、エンドトキシン除去療法を2名に行い、1名を救命することができました。
- その他、新生児のあらゆる疾患に対し対応させていただきます。

地域との連携

当院での治療後に状態が安定した赤ちゃんは、積極的に地域の病院に逆搬送させていただいています。急性期の重症患者に対応するためのベッドを確保する目的だけではなく、早期から地域の病院との関わりを持つことにより、地域でのフォローアップは円滑にすすむと思われます。

入院の調整

異常の疑われる新生児に関しては、遠慮なくご相談ください。重症の場合には、病床が満床でも何とか調整して受け入れさせていただきます。軽症の場合には、地域の病院と連携して搬送先を確保させていただきます。

NICU増床

2012年3月にNICUを12床から15床に増床する工事が終了いたしました。これにより今までよりも余裕をもって重症患者に対応できると思われます。また、同時にNICUの部門システムを導入いたしました。

当院での研修

新生児医療を志す医師、看護師を教育し地域の病院に還元するために、短期、長期を問わず研修を受け入れます。豊富な症例と温かい雰囲気の中、共に新生児の勉強を行いましょ。研修ご希望のかたは、いつでもご連絡ください。



第2回

Mt.Fuji Network Forumを 開催して



去る3月2日(金)、3日(土)の二日間にわたり第2回Mt Fuji Network forumを静岡市のグランシップで開催しました。このフォーラムは当院がアジア・太平洋地域における小児医療拠点施設となることを目指し、アジア諸国と国内主要施設間のネットワークを強化することを目的に、2009年の第1回に引き続き第2回の開催となりました。

前回に引き続き静岡県立こども病院副院長で心臓血管外科部長の坂本喜三郎を実行委員長とし、心臓血管外科、循環器科、循環器集中治療科、周産期・新生児未熟児科のスタッフおよび国内有名小児循環器施設のスタッフからなる委員会が結成され、今回は2つのメインテーマについて多角的に掘り下げてゆくこととなりました。1つめはフォロー四徴症：A to Zと題し、解剖学的特徴に即した治療方針の最前線や成人期を迎えた患者さんの管理・治療方針を取り上げました。2つめは無脾症候群：A to Zと題し、世界の中でもアジア地域に比較的多く見られ、ごく最近になって手術や内科治療の成績が向上してきた無脾症候群の診断・治療についての最前線を取り上げることとなりました。そして心疾患を持つ胎児の周産期諸問題、心臓血管外科周術期管理における諸問題、そして近年情報通信分野のめざましい発展に伴って日本でも日常診療にまで入り込みつつある遠隔診療の現状についても多角的な討論を行うこととなりました。

アジア太平洋地域における著名な施設から今回はオーストラリアのChildren's Hospital at Westmead、マレーシアのNational heart institute、タイのChiang Mai University、ベトナムのChildren's Hospital of Ho Chi Minh、台湾のNational Taiwan University Hospital、中国のChildren's Hospital of Zhejiang UniversityとThe 2nd Xiangya Hospital、韓国のSeoul National University Children's HospitalとSamsung Medical Centerで活躍する各分野のスペシャリストを、国内からは東大、慶応大、東京女子医大、日本大、北里大、岡山大、岩手医科大、京都府立医大、山形大、愛媛大、浜松医大、長野県立こども病院、福岡市立こども病院、榊原記念病院、国立循環器病センター、埼玉医科大学国際医療センター、昭和大学横浜市北部病院、聖路加国際病院（以上順不同）から各分野のスペシャリストを招聘する事となりました。

会期中2日間で日本全国・世界各国からゲストスピーカーを含む99名の参加者があり、初日から活発な議論が繰り広げられました。1日目は実行委員長の坂本喜三郎、小児循環器学会会長である東京女子医大の中西敏雄先生、そして静岡県立こども病院院長の瀬戸嗣郎によるOpening Remarksで幕を開けました。アジア・太平洋各地域の医療の現状についてプレゼンテーションが行われた後、周産期の最前線、1つめのメイントピックであるフォロー四徴症、そして周術期の最前線についての議論を行いました。2日目は無脾症候群についての包括的かつ多角的な議論が展開され、まさにCutting Edgeの治療技術について討議がなされたのち、遠隔診断や連携、症例登録データベースの現状についてのプレゼンテーションがなされました。

議論の合間には静岡茶が振る舞われ、昼食には静岡の幸を一杯に詰め込んだ弁当を味わっていただき好評を博しました。また河村傳兵衛氏（静岡酵母の発見者）を招き静岡の日本酒について紹介をしていただきました。海外の参加者の中にはその場で日本酒を複数本買い求めた方もいらっしゃいました。フォーラムの公式言語は英語で、参加者のほとんどが英語を母国語としないものの、時には熱く議論を行いつつ終始和やかな雰囲気の中進行していきました。1日目の終わりに行われた夕食会では各国の参加者がそれぞれの国の歌や童謡を披露し、日本からは静岡にちなんで「清水の次郎長」や「ふるさと」が披露されました。海外からの参加者を中心に行ったfarewell partyの締めくくりには、参加者全員が肩を組みながら「We are the world」を熱唱するなど医学のみならずお互いに親睦を深めました。

この会は静岡県、日本小児循環器学会をはじめ国内・県内の企業・各種団体の多大なる支援によって開催されました。ここに御礼申し上げます。また、昨年の東日本大震災で被災した心疾患を持つこどもを支援すべく、会費の一部を義援金として心臓病のこどもを守る会を通じて寄附させていただきました。

かつて日本を含むアジア太平洋各国がアメリカやヨーロッパの国々の技術を取り入れ追いつこうとしていた時代から、今やそれぞれの国で高い水準の医療を提供する施設が出来て安定した成績を出し発信を始める時代となりま

した。今回のフォーラムは地理的に比較的近いこれら地域の施設間で交流することが、大変に意義深いものであることをあらためて認識させると同時に、この静岡県立こども病院が国内外に対し中核施設としてその交流を発展させる拠点となりつつあることを印象づける会となりました。今後はこの会で始まった交流をより密にしてゆきながら、さらなる知見を集積して発信し、日本のみならずアジア・太平洋、そして世界の心臓病をもつこども達がよりよい医療を受けられるよう、これまでもまして努力を続けてゆきたいと思えます。



平成23年度地域医療連携事業運営委員会の報告

平成24年3月1日に開催されました。ご出席された委員の先生方です。

青山茂夫様（静岡市静岡医師会副会長）、上田 憲様（静岡県小児科医会会長）、池田恵一様（静岡県立こども病院ほほえみの会代表）、望月導章様（静岡県立中央特別支援学校長）、加治正行様（静岡市保健所長）、瀬戸嗣郎院長。

議長・委員長に青山茂夫様が選出されました。

1. 平成23年度 地域医療連携室の活動報告（2012年1月まで）
新患紹介件数4356件、逆紹介率33%、救急搬送747件、二次救外来1361件（うち入院195件）。入院、外来とも静岡県中部地区が50%台、東部地区が30%台である。
2. 平成24年度 地域医療連携室の活動計画
初診患者様の受診報告書を必ず返信する。病院広報誌を充実する。
3. こども病院の取り組みの紹介
 - (1) 診療連携の重要性 —世界初の心臓手術の経験から—
心臓血管外科 坂本喜三郎副院長
 - (2) 新生児集中治療室の概要 —NICUの増床について—
瀬戸嗣郎院長



質疑応答

- 受診報告書による初回の報告だけでなく、確定診断がついてからの報告書が欲しい。年報をみると学会発表は多いが、論文発表が少ない。こども病院医師から不適切な言葉遣いを受ける場合がある。
- 地域と良い連携がとれているが、さらに病院間でカルテの共有はできないか。カルテの共有は大事な課題であるが、実現できる状態にはなっていない。
- 「発達心療内科」の新患予約待ちを改善できないか。
発達障害児は人数が多いにもかかわらず、診療や療育のための機関が不足している。こどもの総合的な療育センターが必要である。
- 重症児は年々増加しているか、またレスパイトの状況はどうか。
あらたな重症児は増えていない印象だが、医療レベルの向上により寿命が延びている。こども病院に通院する重症児は増加し、44人が在宅人工呼吸器療法を行っている。ショートステイの施設が不足し、両親が疲弊しやすい状況が続いている。

講演会情報

- 06月15日(金) 18:30~20:00 会場：こども病院 大会議室
テーマ：『小児医療と漢方治療』 演者 大阪府立母子保健総合医療センター 小児外科 副部長 川原央好先生
- 07月5日(木) 18:30~19:30 会場：こども病院 大会議室
テーマ：『トリアージ～小児救急から災害医療～』 講師 こども病院 小児集中治療科 金沢貴保医師
- 07月18日(水) 14:00~16:00 会場：こども病院 大会議室
テーマ：食物アレルギー 講師 免疫アレルギー科、栄養指導室
- 08月17日(金) 18:00~19:00 会場：こども病院 大会議室
テーマ：不活化ポリオワクチン定期接種への対応（仮） 講師 名鉄病院予防接種センター長 宮津光伸先生

静岡県立こども病院 外来診療予定表

☆非常勤医師 2012/4/1 現在

診療科		月	火	水	木	金	
内科系	腎臓内科	午前	和田 尚弘	山田 昌由(第2.4.5)	和田 尚弘(新患) 北山 浩嗣		
		午後	山田 昌由		北山 浩嗣		
	血液腫瘍科	午前		工藤 寿子	工藤(第2.4)	堀越 泰雄	工藤 寿子
		午後		堀越 泰雄		工藤 寿子(1.3.5)	工藤 寿子
	内分泌代謝科	午前		上松 あゆ美			上松 あゆ美(新患)
		午後	上松 あゆ美 (生活習慣病外来)	上松 あゆ美			上松 あゆ美
	新生児未熟児科	午前	古田 千佐子				
		午後		野上 勝司	野上 勝司	古田 千佐子	
	遺伝染色体科	午前	石切山 敏			石切山 敏	
		午後	石切山 敏			石切山敏(遺伝相談)	
	神経科	午前	愛波 秀男	☆北條 博厚(第1-3) 愛波・奥村	愛波 秀男(新患)	愛波 秀男 渡邊 誠司	
		午後		☆北條 博厚(第1-3) 愛波・渡邊	愛波 秀男(書類)	愛波 秀男 奥村 良法	
	発達心療内科	午前	小林 繁一		小林 繁一(新患)	小林 繁一	
		午後	小林 繁一			小林 繁一	
	免疫アレルギー科	午前	木村 光明		瀬戸 嗣郎	木村 光明(新患)	木村 光明 目黒 敬章
		午後	木村 光明	目黒 敬章	榎林 成之		木村 光明 榎林 成之
	循環器科	午前	小野 安生		金 成海 田中 靖彦		小野 安生(新患) 新居 正基
		午後	小野 安生	小野(エコー後診)	金 成海 田中(エコー後診)	芳本(トレッドミル)	小野 安生 満下 紀恵
	肝臓外来	午後					☆藤澤 知雄(第1)
救急総合診療科	午前		救急総合診療科	救急総合診療科(午後)	救急総合診療科		
耳鼻咽喉科	午前					☆細川 久美子	
周産期外来	午前	西口 富三	河村 隆一	杉山 みどり	西口・加茂	河村 隆一	
	午後	西口・加茂	河村 隆一	杉山・加茂	河村 隆一	河村 隆一	
外科系	小児外科	午前	福本 弘二(新患) 光永(1.3.5) 渡辺(2.4)		漆原 直人(新患) 渡辺(1.3.5) 光永(2.4)		長谷川 史郎 福本 弘二 ストマ外来(1.3.5.)
		午後	漆原 直人		漆原 直人 処置外来		福本 弘二(外科2.4) (排便機能 第1.3.5)
	心臓外科	午後	坂本 喜三郎				坂本 喜三郎
	脳神経外科	午前		田代 弦 石崎 竜司		田代 弦 石崎 竜司	
		午後		田代・石崎 ☆佐藤倫子(第2.4)		田代 弦 石崎 竜司	田代 弦 石崎 竜司
	整形外科	午前	滝川 一晴			滝川 一晴	滝川 一晴 新患(第1.3.5)
		午後	滝川 一晴 (隔週装具)			滝川 一晴	
	形成外科	午前	朴 修三			朴 修三	
		午後	朴 修三(口蓋裂)				
	泌尿器科	午前		河村 秀樹 濱野 敦	河村 秀樹(第1.3.5)		河村・濱野 (第2.3.4.5)
		午後		河村 秀樹 濱野 敦			
	眼科	午前	☆佐藤 美保(第2.4) (再診のみ)	☆西村 香澄 (再診のみ)			☆彦谷 明子 (再診のみ)
	皮膚科	午後				☆小西(奇数週) ☆八木(第2)	
	歯科	午前	加藤 光剛	加藤 光剛		加藤 光剛	
		終日	☆北村陽太郎(第2)	☆北村陽太郎(第2)			
	麻酔科	午後	堀本 洋	堀本 洋	堀本 洋	堀本 洋	堀本 洋

各診療科医師の異動のお知らせ

退職		採用	
こころの診療科	間宮 由真	こころの診療科	花房 昌美
小児集中治療科	福島 亮介	新生児未熟児科	長澤 真由美
小児集中治療科	土屋 希	小児集中治療科	田村 有人
小児集中治療科	山本 浩継	小児集中治療科	星野 あつみ
麻酔科	北村 祐司	救急総合診療科	京極 敬典
小児外科(副院長)	長谷川 史郎	小児外科	納所 洋
小児外科	福澤 宏明	整形外科	桑田 知幸
心臓血管外科	藤本 欣史		